

女性のアルコール問題、子どもへの影響について

ダルク女性ハウス 上岡 陽江

はじめに

私は若年性アルコール依存症と薬物依存症、摂食障害からの回復者です。今から26年前に施設につながり、アルコールと薬物をやめました。それから自助グループ活動を続け、20年前からはダルク女性ハウス¹⁾を仲間と共に運営しています。今回は女性のアルコール依存症者が治療を受けるうえでの様々な問題点、その背景やライフステージ、子どもへの影響について、当事者かつ援助者である視点から論じます。

女性の依存症者の背景

ダルク女性ハウスで20年間に会ってきた女性依存症者は、重い虐待・暴力、いじめ、軽度の知的障害(障害認定のボーダーライン)、教育機会の欠如、精神疾患、貧困などの背景からおこる困難、不適応、自己否定感に対し、依存症を“使って”生き延びていて、アルコール・薬物乱用は重いトラウマがひきおこす痛みへの「自己処方」ではないかと感じてきました。アルコールや薬物依存症は、重複障害があるときに膠着化する傾向があります。さらに男女の社会的な性別役割の差からおこる暴力被害、経済的問題と密接したパートナーシップ、家事・子育て・介護の負担とそれを行えないときのスティグマといった、女性に特有の問題が複合しています。

従来の回復プログラムにおける問題点【女性はなぜプログラムにのるのが困難か】

プログラム途中における女性の問題には次のようなものがあります。

- a) 身体的・精神的な問題・・・男性との体力の違い。生理及び更年期に関連した症状。トラウマによる思考の歪みや情緒不安定(特にうつ状態)。トラウマ後遺症と薬物依存症の深刻な症状である表現し難い身体的不調・身体感覚の乱れ²⁾など。
- b) 生活における役割・・・女性は家庭のなかで妻または母親として夫の世話や子育て、親の介護に多くの時間を費やし、自己の治療に専念する時間がもてない。
- c) 社会の偏見・・・社会における女性依存症者への偏見は未だ多くある。依存症は性格の問題であるとか自制心の弱い人間であるといった誤解に加え、女性・母親としての社会的イメージから逸脱することで周囲の批判や風当たりは強く、治療・回復を続けていくうえで心理的ダメージが大きい。
- d) 男性中心の治療、研究・・・アメリカで女性依存症者の回復に関する研究がなされたのは1980年前半である。それまで男女同じプログラムが行われており、女性はプログラムにのらないといわれていた。1982年にHIVの母子感染問題が取り上げられたことで、女性の依存症に対して大規模な調査がなされ、女性が子育てのためにプログラムに参加できないという実態が明らかになった。

(その結果を受け、1980年代後半から子どもと母親を含む回復プログラムがはじまった)

これらの問題により、従来のプログラムでは対応できない多くの女性依存症者を生み出してきました。

女性の依存症者にとって、社会が依存症は「病気」であるという認識を持つこと、治療先で辱めを受けないということが非常に大切です。医療従事者・教育・福祉関係者は、特に子どもを持った

女性が相談に来たとき、「母親なのにダメじゃない」といった言葉は避けなければなりません。

「人として価値ある存在」であることを受け止め、強さや自信を取り戻していく、自らの持つ権利を意識することが女性の回復には必要であり、さらに女性としての諸問題が考慮された治療法、包括的関わりがなければ、回復プログラムをすすめていくことは困難です。

当事者が出会う援助者や期間の移り変わりと基本のニーズ³⁾

当事者の経験をまとめ、出会う援助の移り変わりとニーズを 前期 中期 後期 に整理しました。子どもの頃何のサポートもなかった、あるいは 前期 で幸運にも児童福祉の社会資源と出会えたとしても 中期 に一旦使える社会資源を失い迷走します。この期間に本来教えてもらうべき女性としてのセルフケアや性の問題、健康管理等について教育を受けていない可能性があります。この時期、アルコールや薬物依存症、様々な精神症状をとともない精神科臨床に姿を現すと思われませんが、社会資源やパートナーを取り替えながらも、とにかく生き延びることで 後期 へと移行できます。

ダルク女性ハウスの活動について

(1) 依存症が病気であることの理解

女性の依存症者の多くは、自分はダメな人間だと思い込み、社会からも判を押され、女性であり依存症であることを深く恥じています。治療に行く先々、自助グループのなかでさえ、女性なのになぜという言葉が投げかけられます。

そこで私たち当事者は、自分たちに起きていることを言葉にしていく作業を5年前からはじめました。

人生をあきらめている人たちが集まり、みんなにとっての問題を文章にしていくなかで、自分にとっての依存症が何であったのか、社会に対しできることは何か考え、成長していくことを大切な活動としています。再飲酒のきっかけは、更年期、配偶者を亡くした時、仕事をなくしたときと様々ですが、「一人で寂しい」と言えないとき、自分ひとりで何とかしようとするときに飲酒欲求が出てきます。どんな時でも自分の体験を話し分かち合うことが仲間の役に立ちます。

(2) 子どもと母親のためのプログラム

女性の依存症者にとって子どもの問題は大きく、アメリカの調査では、女性の再飲酒要素の75%は、子どもの問題であるという結果が出ています。母親の問題が落ち着いてくると、子どもは体調を崩したり退行したり、不登校や非行といった問題が表面化してきます。子どもには、大人から暴力をふるわれぬかどうかを試すというやり方しかできない時期があるのです。

ダルク女性ハウスでは、孤立しない子育てのためのプログラム、子どもの居場所・相談・遊び場・「先生や親ではない」大人とのつながりを感じるプログラムがあります。プログラムを通し、子どもは母親が大切にされていることがわかり、子どもたちは、解決ではなく寄り添う関わりをされることで、人を信じられる大人になっていきます。

【脚注】

- 1) 「ダルク女性ハウス」は薬物・アルコール依存症回復と自立を支援する、日本で最初の女性のための民間施設。1991年から活動する。2) ダルク女性ハウス：Don't You? ~私もだよ~,ダルク女性ハウス,2009年
- 3) 上岡陽江 大嶋栄子：その後の不自由, 医学書院, 2010年